

ゲルマン祖語の母音組織とウムラウト (II)

森 基 雄

前回(I) (森 1996) では主に短母音の Gmc. *i*, *e*, *u* の動向に注目したが、今回(II)では Gmc. \bar{e}_2 , *eu* を反映するとされる母音を取り上げてみたい。

まず \bar{e}_2 についてであるが、これが IE *ei* > Gmc. \bar{e}_2 という a-ウムラウトの結果であるとする van Coetsem (1972: 196-8) の見解は受け入れ難い。なぜならば、もし仮に *ei* > \bar{e}_2 の a-ウムラウトが実際に起こっていたならば、Connolly (1979: 5, 15), Voyles (1980: 90-91) の言うように、強変化動詞第1類の現在形の語根母音にはこの a-ウムラウトの有無による *i* と \bar{e}_2 の交替が見られるはずであるが、そのような交替は実際にはまったく現れず、もっぱら *i* のみが現れるからである。

証拠に乏しいが、IE *ei* に由来するとされる Gmc. \bar{e}_2 を持つ例について考えてみたい。

Go. *fēra*, OHG *fiara* 'side' は Skt. *sphāra*- 'spread out, wide', *sphira*- 'fat', *sphāyate*, 過去分詞 *sphita*- 'grow fat' と同語源であるとされる。そして *sphāra*-, *sphira*-, *sphāyate* は帯気音化し [a] の音色を与える喉音 A_2 を伴う IE $*(s)peA_2i$ - を、そして *sphita*- は弱化階梯の IE $*sp_0A_2i$ -to- を反映すると Connolly (1979: 18) は考える。Lehmann (1952: 67-8) は、 \bar{e}_2 は IE *ēi* にさかのぼるとする Jellinek (1891) の見解を引き継ぎ、そしてさらに喉音理論により、この *ēi* は IE /eXy/ にさかのぼるとしているが、 $X=A_2$ という前提に立てば、 $*peA_2i$ - は $*paA_2i$ - > Go. **faira*, OHG **fēra* となってしまうであろう。そこで Connolly (1979: 18) は Go. *fēra*, OHG *fiara* もまた弱化階梯の IE $*p_0Ai$ -r- を反映するものと考え。同様に Connolly (1979: 18-19; 1980: 111) は OHG *skēri*, *skiaro* 'clear, perspicacious' は同語源であるかもしれない OHG *sceidan* 'separate' < $*skeA_2i$ - または OHG *heitar* 'bright', Lat. *caelum* 'heaven', Gk. Dor. *skānā* 'tent, stage' < $*(s)keA_1i$ - から見て、Lehmann (1952: 68) の主張する /eXy/ ではなく $*sk_0Ai$ -r-jo- を反映すると考える。また OI *skið* 'ski', OE *scid*, OHG *skit* 'pieces of wood' は、同語源と思われる正常階梯の Lat. *caedō* 'strike' < $*keA_2id$ -, 同じく正常階梯の Go. *skaidan*, OE *scādan*, OS *skēdan*, *skēthan*, OHG *sceidan* 'separate' < $*skeA_2i$ -t-, そしてゼロ階梯の Gk. *skhízō* 'split' < $*skA_2i$ -d-j-, Skt. *khidati* 'depress' < $*kA_2id$ - から見て、弱化階梯の $*sk_0A_2i$ -to- を反映していることになるであろう。

Connolly (1979: 19-20) は、弱化階梯の $0Ai$ は時には \bar{e}_2 に、また時には *i* に発達したので

あり、このことはゼロ階梯の Ai が時には e, また時には i として現れるという事実には平化した発達を反映するものであるとしている。例えば Go. skeirs, OI skirr, OE scir, OS skir ‘clear’ と前記の OHG skēri, skiaro, また OE wir と OHG wiara ‘(gold) wire’, そしてオランダ語の krijg ‘war’ < *krig と OHG chrēg ‘obstinance’, NHG Krieg ‘war’ は。Xi のこの二重の発達の結果かもしれない。確かに。Xi>ē₂, Xi>e は南部のゲルマン語である古高地ドイツ語に多い発達であり、北部のゲルマン諸語では。Xi>i, Xi>i の方が優勢である(前回(I)では i>e の a-ウムラウトという解釈の方を支持したか、ここでは便宜上 Connolly の Xi>e という理論に一応従った)。

OHG steg ‘small bridge’ と stega ‘step, stair, ladder’ は一般に stigan ‘to climb’ < IE *steigh- と同根であるとされるが、Connolly (1977: 346) は steg, stega は Xi>e を、また OHG stiega ‘lattice’, stiagil ‘rung, rank’ は。Xi>ē₂ を反映し、これら 4 者は互いに同根であるが、喉音を持つとは考えにくい stigan とは同根ではないと考える。

OHG skēri, stiagil は、前述の van Coetsem の理論に従うならば、*skiri, *stigil となるべきところであり、従って van Coetsem の理論は容認できないものである。

Voyles は i>e は隣接する喉音が原因ではなく、a-ウムラウトの結果であると考え、ē₂ を喉音なしに延長階梯の ēi として扱っている。

Voyles (1989: 34) は、例えば IE *kēir ‘here’ > Go. hēr, NWGmc. *hēr; IE *stēigh- ‘climb’ > Gmc. *stēig- > NWGmc. *stēg- > OHG stiega ‘lattice’ と考え、前者には同根でゼロ階梯の Go. hiri ‘come here’ があり、後者は明らかに強変化動詞第 1 類の *steigh- とアプラウトの関係にあると主張している。

また ēi>ē という公式を裏付ける根拠として、Voyles は ēi>ē と平行して ōu>ō という変化もあったと主張している。Voyles (1989: 34) はその例として OI bōndi ‘farmer’, būa ‘to dwell’, そして OI gōmr, OHG gaum ‘gum’, giumo ‘throat’ を挙げており、OI bōndi < IE *bhōu-, OI būa < IE *bhu-; OI gōmr < IE *ghōum-, OHG gaum < IE *ghoum-, OHG giumo < IE *gheum- というように、これらは実は互いにアプラウトの関係にあったとしている。

Voyles (1989: 34) は、OI būa は従来主張されている IE *bhū- < *bhuX- ではなく IE *bhu- に由来し、OI būa における ū は ‘stressed vowel lengthening’ という規則によって引き起こされる長音化の結果とみなす。しかしこれと同根の Skt. bhavitum ‘to be’, bhūtas ‘been’ はそれぞれ喉者を伴う IE *bheuX-, *bhuX- にさかのぼるものと考えられる以上、OI būa における ū はやはり喉音が後続していたことに起因すると考えるべきではないだろうか。そうなると ōu>ō の例として Voyles が挙げた OI bōndi における ō は ōuX に由来するということになるが、これが後続の喉音の有無とは無関係に起こった単母音化とみなせるのであれば、Voyles の提案する ōu>ō という公式が否定されることはない。

さらに $\bar{e}_i > \bar{e}$ を裏付けるものとして Voyles は OHG *gāt, gēt* ‘goes’ を挙げている。Voyles (1989 : 37) は *gāt* が語幹形成母音を伴わない Gmc. **gēd* に由来するのに対し、*gēt* はそれを伴う **gēid* に由来するとしている。

$i > e$ の変化、 \bar{e}_2 をどこまでも語源的に喉音によって説明しようとする Connolly の見解に反し、結局 Voyles は昔ながらの見解に戻っていることになり、またそれを裏付けるような新たな根拠が挙げられている点は特に秀れているように思われる。

Lehmann による $eXi > \bar{e}_2$, $Xi > ai$ というとらえ方よりも Connolly の主張する $eEi > i$ (OHG *kliban* ‘to adhere’, OE *slīdan* ‘to slide’), $Xi > i$, \bar{e}_2 という解釈の方が本当に妥当なのかどうか、印欧祖語の段階から無声音であった *ph, th, kh* がすべて後続の喉音との結合に起因するものなのかどうか、すなわち語源関係についてどこまでも喉音による説明を貫き通すことが可能なのかどうか、必ずしもはっきりしているとは思えない以上、喉音にもっぱら頼ろうとする考え方が問題を解く完べきな手段として信頼するに足りるものと言えるかどうか、依然として疑問が残る。

次に、ウムラウトにいくらか関連があると思われるものとして、強変化動詞第7類の過去形の母音についての問題を取り上げてみたい。

ゴート語ではこの動詞類の過去形は印欧祖語からの古い重複接頭辞を保有するが、北、西ゲルマン語では古英語と古アイスランド語におけるわずかな残存形を除き、重複接頭辞は失われ、その代り語根には Gmc. \bar{e}_2 , *eu* に対応するとされる母音が現れる。その主な例のいくつかを挙げてみよう。

①現在形の語根母音に Gmc. *ai* を持つもの : Go. *haitan*, OI *heita*, OE *hātan*, OS *hētan*, OHG *heizan* ‘to command’, 過去形 Go. *haihait*, OI *hēt*, OE *heht, hēt*, OS *hēt, hiet*, OHG *hiaz*.

②現在形の語根母音に Gmc. \bar{e}_1 を持つもの : Go. *lētan*, OI *lāta*, OE *lāetan*, OS *lātan*, OHG *lāzan* ‘to let’, 過去形 Go. *lailōt*, OI, OE *lēt*, OS *lēt, liet*, OHG *liaz*.

③現在形の語根母音に Gmc. *au* を持つもの : OI *hlaupa*, OE *hlēapan*, OHG *loufan* ‘to leap’, 過去形 OI *hliōp*, OE *hlēop*, OHG *liof*; Go. *aukan*, OI *auka* ‘to add’, 過去形 Go. *aiauk*, OI *iōk*.

④現在形の語根母音に Gmc. \bar{o} を持つもの : OE, OS *hrōpan*, OHG *ruofan* ‘to shout’, 過去形 OE *hrēopon*, OS *hriop*, OHG *riof*; OI *rōa*, OE *rōwan* ‘to row’, 過去形 OI *rera*, OE *rēow*.

⑤現在形の語根母音に Gmc. \bar{u} を持つもの : OI *būa* ‘to dwell’, 過去形 *biō*.

このユニークな第7類の、特にその北、西ゲルマン語の過去形の母音を説明するために多くの見解が提出されてきたが、それらを大きく分けると、次の2つの考え方にまとめることができるであろう。すなわち、北、西ゲルマン語の過去形は、(A)例えば OE *hēt* < NWGmc. **hē₂t*

<Gmc. *hehaita (Go. haihait); OE hlēop<NWGmc. *hleup<Gmc. *hlehlauþa のように、重複接頭辞を持つまさにゴート語に見られるような形から、その重複接頭辞と語根の母音が縮合されることによって生じたとする考え方、そして(B)もとから重複接頭辞のない、ゴート語とは無関係な別の形から来ているとする考え方である。

(B)の考え方を主張する van Coetsem の見解を要約すると次のようになるであろう。北、西ゲルマン語では重複接頭辞は放棄され、他の大部分の強変化動詞類の現在形と過去形におけるアプラウトによる Gmc. e:a (<IE e:o) という交替が第7類に導入された。しかし第7類の多くは他の大部分の強変化動詞類とは逆に現在形にすでに Gmc. a を含んでいたために、他の大部分の強変化動詞類とは逆の a:e という形による交替が定着した。すなわち ai-動詞の、例えば Gmc. *haitanan (Go. haitan) からは過去形の NWGmc. *heita ‘I commanded’ が、そして au-動詞の、例えば Gmc. *hlaupanan (Go. hlaupan, OI hlaupa) からは過去形の NWGmc. *hleupa ‘I leaped’ が形成され、*heita は a-ウムラウトにより *hē₂t となった。そして ai-動詞のこの過去形の様式が *lē₁tanān ‘to let’ のような ē₁-動詞に、そして au-動詞のこの過去形の様式が *hrōpanān ‘to shout’ のような ō-動詞、*būanan ‘to dwell’ のような ū-動詞に類推的に拡大されたのだという。

しかし ei>ē₂ の a-ウムラウトが実際に起こっていたならば、それは強変化動詞第1類の現在形にも頻繁に現れていたはずであるが、実際にはそれはまったく見られない。この点については本稿でも最初に指摘したとおりである。逆に ai-動詞の接続法過去形は次音節にすべて i を伴っていたのだから、その語根母音は、van Coetsem の理論に従うならば、ei>i となっていたはずであるが、実際には一貫して ē₂ が現れているのである。従って ē₂, (ei>) i はウムラウトによるものではなく、次音節の母音とは無関係なものであり、van Coetsem のように ai-動詞の過去形の語根母音として ei を仮定することは不可能と思われる。この点についてもまた Voyles (1980: 90-91) が反論しているとおりであるろう。

ところで前回(I)で述べたように、ゴート語では一般に IE e は強勢音節では次音節の母音とは無関係に r, h の前では ai[e] として保持された以外はすべて i となった。しかし第7類の過去形では haihait; saislēþ, saizlēþ (不定詞 slēþan ‘to sleep’); ai auk などのように重複接頭辞の母音はそこへどんな音が後続しても ai[e] である。ゴート語の saizlēþ (<Gmc. *seslēþa) という形からも明らかなように、語根初頭の s がヴェルネルの法則により z となっている。この事実は重複接頭辞が少なくとも印欧祖語、ゲルマン祖語の段階では無強勢であったということを裏付けるものである。Voyles (1980: 92-6) は、ゴート語においても重複接頭辞は無強勢のままであり、強勢はあくまでも語根にあったとしており、また重複接頭辞の母音が i とはならず例外なく ai[e] のままであったのは、それ自体が無強勢であり、かつ強勢を持つ語根音節の前位置にあったためであると主張している。

北、西ゲルマン語の第7類の過去母音の形成については、特に最近では(A)の考え方を支持す

る Voyles (1980, 1989), Fulk (1987) の研究が注目される。この Voyles, Fulk の理論に沿って、ゴート語に見られるような重複接頭辞を伴うもとのゲルマン祖語から北、西ゲルマン語形に至るまでの発達を手短かに示してみよう。

(1)ゲルマン祖語では第7類はゴート語でのように過去形を重複 (reduplication) により形成した：**háitan* > **heháit* (Go. *haihait*), **létan* > **lelét* (ゴート語では実際にはアプラウトを伴う *lailōt* という形が現れるが、北、西ゲルマン語ではアプラウトを伴わない形が前提となる), **hláupan* > **hehláup*, **áukan* > **éauk* (Go. *aiauk*), **hrópan* > **hehróp*, **búan* > **bebú*。第7類の過去形では前記の Go. *saizlēp* という形から見ても、重複接頭辞に後続する語根初頭の子音はヴェルネルの法則を受ける環境にあったことは明らかであり、**heháit*, **hehláup*, **hehróp* よりも本来ならば同様にヴェルネルの法則を反映する **hegáit*, **hegláup*, **hegróp* という形の方がより正確なのであろうが、実際には北、西ゲルマン語の初期の段階で語根初頭の子音にはヴェルネルの法則はもはや適用されなくなっていたようであり、理論の展開上あえて考慮に入れる必要もないため無視した。また、例えば、Go. *slēpan* の過去形が **slaislēp*, **slazlēp* ではなく *saislēp*, *saizlēp* となっているのは、重複接頭辞では語根初頭の子音群を無条件にそのまま持ち込むのではなく、阻害音の後の共鳴子音を削除するという規則によるものである。**hlehláup*, **hrehróp* ではなく **hehláup*, **hehróp* という形が仮定されるのはそのためである。

(2)次に北、西ゲルマン祖語の初期のある時期において強勢が語根から語頭の重複接頭辞に移った：**heháit* > **héhait*, **lelét* > **lélēt*, **hehláup* > **héhlaup*, **éauk* > **éauk*, **hehróp* > **héhrōp*, **bebú* > **bébū*。

(3)従って、さらに後期のある時期になると、重複接頭辞であるはずの部分が語根として解釈し直され、そこへ後続している部分、すなわち本来の語根であるはずの部分が次は語根に後続する付加的なもののように解釈し直されていったものと思われる。Voyles (1989 : 21-2) はこの段階での第7類の過去形は共時的には次のような規則によって再解釈され形成されるようになったと考える：**háitan*, **létan*, **hláupan*, **hrópan*, **búan* > (現在形の語根母音を *é* に取り替える) **hét*, **lét*, **hlép*, **hrép*, **bé* > (語根母音 *é* の後に語頭子音または子音群を挿入する) **héht*, **lélt*, **hléhlp*, **hréhrp*, **béb* > (語根母音 *é* の後に挿入された語頭子音または子音群の後にもとの現在形の語根母音を挿入する) **héhait*, **lélēt*, **hléhlaup*, **hréhrōp*, **bébū*。そして **hléhlaup*, **hréhrōp* > (語頭子音群において阻害音の後の共鳴子音を削除する) **héhlaup*, **héhrōp*。また **áukan* のように語根が母音で始まるものについては **áukan* > (現在形の語根母音の前に *é* を挿入する) **éauk*。後の世代の話者の思いつきによるこうした再解釈を Voyles は *abductive change* の一例としてとらえている。Voyles (1989 : 22) はさらに、この時代の話者にとってこれらの思いつき規則のうちでも特に、語根母音 *é* の後に挿入された語頭子音または子音群の後にもとの現在形の語根母音を挿入するという規則、

そして語頭子音群において共鳴子音を削除するという規則は他に類例のない奇異な規則に思えたにちがいないため、この2つの規則はやがて消失していったと考える。そしてこの段階での結果のままで残ったのが OE *heht* ということになる。

(4)さらに Voyles (1980 : 110, 114-5 ; 1989 : 22) によれば、現在形の語根が子音または子音群で始まるものもまた後に **aukan* のような語根が母音で始まるタイプと同じ規則により形成されるようになった : **háitan* > **héait*, **létan* > **léēt*, **hláupan* > **hléaup*, **hrópan* > **hréōp*, **búan* > **béū*。やがて無強勢の *ai*, *au* はそれぞれ *ē*, *ō* となったため、**héait* は **héēt*, **hléaup* は **hléōp* となり、その結果、既存の母音以外のものとして *eē*, *eō*, *eū* が現れることになるが、これらは北、西ゲルマン語における表層音声制約 (surface phonetic constraint) により、他の既存の最も近い母音へと改められた。すなわち *eē* は *ē*, そして *eō*, *eū* は *eu* となった。

確かに古英語では *au*-動詞の過去母音は Gmc. *eu* の反映と完全に融合しているが、他のゲルマン語では必ずしもそうになっていない場合がある。その証拠として Connolly (1979 : 13), Fulk (1987 : 166) は次のような例を挙げている。古西フリジア語では Gmc. *eu* は通常 *iā* (*iē*) であるのに対し、*au*-動詞の過去母音は *hliōp* のように *iō* となっている。古高地ドイツ語の *au*-動詞の過去母音の場合、OHG *stōzan* (Go. *stautan*) ‘to push’ の過去形は次音節にそれぞれ *u*, *i* がある場合でも **stiuzum*, **stiuzi* ではなく *stiozum*, *stiozi* となっている。そして古アイスランド語では Gmc. *eu* は *i*-ウムラウトの環境にない場合、歯音の前では *iō*, それ以外の子音の前では *iū* となるのが原則であるにもかかわらず、*au*-動詞の過去母音は歯音の前以外でも *iō* となっている。例えば *hlaupa*, *auka* の過去形は **hliūp*, **iūk* ではなく *hliōp*, *iōk* となっている。Connolly, Fulk は指摘していないが、*au*-動詞で OS *stōtan* (OHG *stōzan*) の過去単数は予想どおり *stiot* となっているのに対し、過去複数では予想される **stiutun* ではなく実際には *stiotun* となっており、*au*-動詞 ‘to leap’ の過去複数も予想される *iu* を持つ形ではなく OS *hliopun*, OHG *liofun* であり、*ō*-動詞の OS *hrōpan*, OHG *ruofan* の過去複数もそれぞれ予想される **hriupun*, **riufun* ではなく *hriopun*, *riofun* である。

すでに前回(I)で見たように、北、西ゲルマン語では Gmc. *eu* はまず次音節の *i*, *j* の前では *iu* となり、古サクソン語と古高地ドイツ語ではさらに次音節の *u* の前でも *iu* となった。しかし古高地ドイツ語では方言によっては次音節にもともと *i*, *j*, *u* がなくても *eu* が *iu* となっている。すなわち古高地ドイツ語のうち、中部ドイツ語 (フランケン方言) は次音節の母音の影響のみにより (*eu* >) *eo*, 後に *io*, (*iu* >) *iu* を持つが、上部ドイツ語 (バイエルン方言とアレマン方言) では *io* は *a*, *e*, *o* の後続していた歯音と Gmc. /x/ の反映の前にのみ現れ、他の子音、すなわち唇音、(Gmc. /x/ を除く) 軟口蓋子音の前ではたとえそこに *a*, *e*, *o* が後続していた場合でも *iu* が現れる。

古サクソン語	中部ドイツ語	上部ドイツ語
siok 'sick' <*seukaz	sioh	siuh
liof 'dear' <*leubaz	liob	liup
diop 'deep' <*deupaz	tiof	tiuf
liogan 'to tell a lie'	liogan	liugan
biodan 'to offer'	biotan	biotan
liudi 'people'	liuti	liuti

同様のことは古アイスランド語についても言えるであろう。すなわち前記で古アイスランド語の au-動詞の過去母音の現れ方について述べた際に触れた Gmc. eu の古アイスランド語における現れ方についてさらに具体的に見ると、古アイスランド語では Gmc. eu はたとえ次音節に a, e, o が後続していた場合でも g, k, f, p, R の前では PN iu, 後に OI iū となった: siūkr (OS siok) <*seukaz; liūfr (OS liof) <*leubaz; diūpr (OS diop) <*deupaz; liūga (OS liogan)。R の前での例としては dȳr 'animal' <PN *diuRa (Go. dius, OE dēor, OS dior, OHG tior) <Gmc. *deuzan; hlȳr 'Wange' (OI, OS hlust 'Gehör' とアプラウトの関係にあり同根) <PN *hliuRa (OE hlēor, OS hlīor) <Gmc. *hleuzan があり、PN iu > OI iū がさらに ȳ となっているのは後続の R の影響によるものである。しかし他の子音の前では iō となった: biōða (OS biodan), kiōsa (OS kīosan) 'to choose', tiōa 'fördern' (OS tīohan 'to draw, lead')。

Fulk (1987: 166) は、第7類の au-動詞と o-動詞の過去母音が Gmc. eu とはやや異なった現れ方をしている原因は、現在形の語根母音の前への é の挿入が生み出したものが二重母音 (diphthong) というよりもむしろ bivocalic sequence であり、挿入された é の後にある程度のすき間 (hiatus) があったためであるとしている。

しかし古高地ドイツ語でも前述の上部ドイツ語では au-動詞, o-動詞の過去形でも liuf, liufun (OI hliōp, 中部ドイツ語の liof, liofun), riuf, riufun (中部ドイツ語の riof, riofun) は Gmc. eu と同じ発達を示している。

Connolly, Fulk は指摘していないが、第7類の過去母音にはこれ以外にもゲルマン祖語からの本来の発達とは食い違う例がある。それは OI hōggva 'to hew' の過去複数 hioggum, OI būa 'to dwell' の過去複数 bioggum である。前者に対する対応形としては OE hēawan, OS hauwan, OHG houwan 'to hew', 過去複数 OE hēowon, OHG hiowun がある。前者の場合、現在形は *hauwanan (*hawwanan) に由来するとされる。過去複数は、前者の場合 *heuw- (*heww-), 後者の場合 *beuw- (*beww-) に由来するとされる (Lehmann 1952: 41, 43; Voyles 1980: 102)。他方、明らかに本来の Gmc. euw(eww) を持つ例としては Go. triggws, OI tryggr 'true', OE trēow, OHG triuwa 'loyalty, fidelity', OI bygg, OE bēow 'barley' がある。しかし OHG hiowun の場合、その本来予想される形は *hiuwun

であろう。現に上部ドイツ語では前記の *liufun*, *riufun* と同様、本来の Gmc. *euw*(*eww*) からの発達と同じ *hiuwun* となっており、中部ドイツ語ではそれに反し *hiowun* となっている。この *hiowun* にも前述の Fulk (1987: 166) 見解が当てはまるかもしれない。

しかし最も説明の難しいのは OI *hioggum*, *bioggum* ではないだろうか。確かにこの場合 Gmc. **hehauw-* (**hehaww-*), **bebū-* が Voyles の説く前述の過程により単音節の **heuw-* (**heww-*), **beuw-* (**beww-*) となったことが一応前提となるかのように見えるが、もし Lehmann, Voyles の考えるような、ゲルマン祖語のものと同じとも思える *euw* (*eww*) がこのようにそのまま前提となるのなら、その本来予想される発達形は **hygg-*, **bygg-* となるのではないだろうか。従ってこの場合もまた前述の Fulk の見解が何らかの形で当てはまるのであろうか。

いずれにしても van Coetsem が提案した強変化動詞本来のアプラウトの逆方向での導入という見解は受け入れ難いものであるということがこれでなお一層はっきりとしたことは明らかであろう。

このように第7類の過去母音は印欧祖語、ゲルマン祖語から直接に引き継がれたものからはやや逸脱した特殊で数少ない、そして扱にくい例であり、ウムラウトなど後続音の影響による音変化との関連という点でも無視できないと思われるので本稿であえて取り上げてみた。

参 考 文 献

- Braune, W. & E. A. Ebbinghaus. 1989¹⁵. *Abriss der althochdeutschen Grammatik*. Tübingen: Niemeyer.
- Campbell, A. 1959. *Old English grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Cercignani, F. 1973. "Indo-European *eu* in Germanic." *IF* 78, 106-12.
- Connolly, L. A. 1977. "Indo-European *i* > Germanic *e*: an explanation by the laryngeal theory." *PBB* 99, 173-205, 333-58.
- Connolly, L. A. 1979. " \bar{e}_2 and the laryngeal theory." *PBB* 101, 1-29.
- Connolly, L. A. 1980. "'Grammatischer Wechsel' and the laryngeal theory." *IF* 85, 96-123.
- Fulk, R. D. 1987. "Reduplicating verbs and their development in Northwest Germanic." *PBB* 109, 159-78.
- Heusler, A. 1967⁷. *Altisländisches Elementarbuch*. Heidelberg: Winter.
- Jellinek, M. H. 1891. "Germanisch \bar{e}^2 ." *PBB* 15, 297-301.
- Keller, R. E. 1978. *The German language*. London-Boston: Faber and Faber.
- Lehmann, W. P. 1952. *Proto-Indo-European phonology*. Austin: University of Texas Press.
- 森 基雄. 1996. 「ゲルマン祖語の母音組織とウムラウト (I)」『(奈良産業大学) 産業と経済』第10巻 第5号—人文・自然・体育特集号, 65-75.
- Moulton, W. G. 1961. "Zur Geschichte des deutschen Vokalsystems." *PBB* 83, 1-35.
- Ranke, F. & D. Hofmann. 1979⁴. *Altnordisches Elementarbuch*. Berlin: de Gruyter.
- Seebold, E. 1970. *Vergleichendes und etymologisches Wörterbuch der germanischen starken Verben*. The Hague-Paris: Mouton.
- van Coetsem, F. 1972. "Proto-Germanic morphophonemics." *Toward a grammar of Proto-Germanic* (F. van Coetsem & H. L. Kufner, eds.), 175-209. Tübingen: Niemeyer.
- von Kienle, R. 1969². *Historische Laut- und Formenlehre des Deutschen*. Tübingen: Niemeyer.

ゲルマン祖語の母音相織とウムラウト (II)

Voyles, J. B. 1980. "Reduplicating verbs in North-West Germanic." *Lingua* 52, 89-123.

Voyles, J. B. 1989. "Laryngeals in Germanic." *American Journal of Germanic Linguistics and Literatures* 1, 17-52.